

『ほつとたいむ通信』

第三十二号

あけましておめでとーございます。
お正月はいかがお過ごしになりましたでしょうか。
昨年は日本および世界で色々な出来事が起きた年でした。
今年はどうなるのでしょうか。心が安らぐ年になるといいですね。

『ほつとたいむ通信』を読んでいただき、少しでも心の癒しになればと思います。



『手伝つてくれませんか?』

一九八八年、マグニチュード八・二という大地震がアルメニアを襲い、たった四分間で三万人を超す人々の命を奪った。

破壊と混乱のさなかある男が、妻は危ないので家に残り、自分は急いで息子がいるはずの学校に駆けつけた。

ところが校舎は跡形も無く崩れ、学校は廃墟と化していた。

あまりの惨状にしばし呆然と立ちすくんだものの、我に返ると男は急に思い出した。

「何が起ころともお父さんは必ずお前のところに行つてあげるよ」と、息子に約束していたことを。

涙が溢れそうになりながら、校舎だったはずの瓦礫の山を眺めた。

この様子ではもう望みはないのかもしれないが、息子との約束を何とか果たさねばならなかった。

そこで毎朝学校の中をどのようにして息子と一緒に教室まで歩いて行つたかを必死に思い起ころした。

建物の右後方に教室があったことを思い出すと、駆けつけて崩れたれんがを掘り始めました。

掘っていると、他の親達も子供を捜しにやつてきた。

悲しみに胸をかきむしつて我が子の名を叫ぶ人もいれば、中には善意から「もう手遅れですよ」「もう助けられないよ」「家に帰りなさい」「しっかり現実を見て。もうどうにも出来ないんだから」などと言って、彼を瓦礫から引き離そうとする人もいた。

でも男は言われる度に「こう尋ねました。

「今すぐ手伝つてくれませんか?」と、そしてまた石を一つずつ取り除いて息子を掘り出す作業を続けるのだった。

やがて消防署の班長が現れ「火事や爆発があらこちで発生し危険です。から後のことは我々に任せて帰宅しなさい」と 言つて彼を立ち退かせようとした。

しかし、この時もこの父親は「今すぐ手伝つてくれませんか?」と。

今度は警官がやつて来て言った。「こんなことになって混乱しておられるのは良くわかりますがもうやめてください。あなただけじゃなく、まわりの人たちにとつても危険です。後は我々が引き受けます」

男はまた「今すぐ手伝つてくれませんか?」と聞いたが、誰も手伝つてく

れなかった。

勇敢にも彼はたった一人で掘り続けた。息子がまだ生きているのか、もう死んでしまったかを自分の目で確かめたかったのだ。

八時間、十二時間、三十六時間とひたすら掘り続けた。そして三十八時間が経ち、やっと大きな石の塊を引っ張り起ころした時、息子の声が聞こえたのだ。

「アーモンド!」

と、子供の名前を大声で呼ぶと返事があつた。

「お父さん、ぼくだよ!お父さん!他の子に心配しないでつて言つてんだよ。もしお父さんが生きていれば、きっとぼくを助けに来てくれるし、ぼくも助ければ皆も助かるんだからつてね。何が起ころても必ずぼくのところに来てくれるつて約束してたけど、やっぱり来てくれたんだねお父さん」

「その中はどうなつているんだ?大丈夫か?」

「三十三人のうち十四人が残つているよ。怖かつたし、お腹が空いたし、喉もカラカラ!お父さんが来てくれてみんな大喜びだよ。建物が壊れた時、ちよつとトライアングルみたいな隙間ができたんで助かつたんだ」

「さあ、出ておいで」

「ダメだよお父さん。他の子を先に出してあげてよ。だつてお父さんは必ずぼくを助けてくれるから。何が起ころても、必ずぼくのところに来てくれたもの」



どのように お感じになりましたか。

世界各地で大地震による死傷者が多数出ています。

日本でも東日本大震災により多数の死者、不明者が出ました。次は東海・東南海・南海の大地震が近い将来発生すると言われております。そんな中で、このエッセイはどんな状況でも決して諦めてはいけけないということを変更して考えさせてくれるのではないのでしょうか。

株式会社 三悦

代表取締役 樋田 浩三

平成 二十四年 一月